

友誼の聲

THE VOICE OF FRIENDSHIP

2011年8月

第85号

日本語版

イエズス会中国センター
Tokyo Jesuit China Center
東京都台東区下谷 1-5-9 「上野教会方」
Tel : 03-3842-4407 Fax : 03-3842-4408
E-mail : jccstaff@yo.rim.or.jp
http://www.sjchina-japan.org

イエズス会中国センターと出会って

私は1943年1月19日に遼寧省瀋陽で生まれました。その頃は奉天と呼ばれていました。三年後の1946年9月に日本に帰って来て広島に住み、1961年に東京に出て来て、翌年、洗礼を受けました。そして1970年に神学校に入り76年に司祭になりました。今年になって、岩橋神父様が事故で入院されたので、上野教会に来てお手伝いをするようになり中国センターの皆さんともおつきあいをするようになりました。ミサで説教をしたり、ミサのあとでお茶を頂きながらゆっくりお話しする機会が与えられ、少ない言葉ながらも、その人柄や暮らしの様子が分かってとても驚いたり教えられたりしています。大変な中で、よくがんばっておられると感心することばかりです。

私が中国で生まれたということは、私にとって大きなことです。両親は、中国にいたときのことを、ほとんど話してくれませんでした。楽しい日々であったことは確かですが、それがどれだけ現地の方々の犠牲の上にあったかを良く知っていたからだろうと思います。そういう話しをしないうちに母が死に、父も死んでその頃のことを聞くことができないうちに今に至っています。とても残念なことですが仕方がありません。そのために、私なりに、本を読んだり、記録の写真や映像をみて勉強しました。今、

中国センターで、割と若い中国人に会っているとき、私の心に去来することは、日本人が与えた苦痛への謝罪です。同じカトリックの信仰で結ばれているからこそ、謝罪の心ははっきりしています。物事には、時間が経てば薄れてしまうこともあります。しかし、日本人が中国で犯した罪は無くなることも薄れることもありません。できるなら忘れてしまいたい、なかったことにしたいという気持ちを、分かっている日本人が持っていることは確かです。しかし、それはあり得ないことです。事実は事実です。時間が経てば経つ程、はっきりと浮かび上がってきます。

私の父母は、ほとんど話さないまま死んでゆきました。私は今68歳ですが、カトリック教会で洗礼を受け、司祭に叙階され35年経ちます。私の人生の半分はカトリック司祭として奉仕する生活でした。この生き方は多分、死ぬまで続きます。その中で、片時も忘れてならないと思うことは謝罪です。父や母の時代にことだけではなく、それ以前の時代のことも忘れてはならないと思っています。カトリックの信仰は、罪を認め、ゆるして頂き、償いを果たしてゆくことを大切にしています。大切にするというより、それが神様の愛のなせる技であると宣言しています。カトリック教会に入れて頂いたことは、私に

とって生涯の恵みです。それは、神様の愛の中で、いけなかったことはいけなかったと正直に認め、ゆるしを頂き、償いをしてゆく道の保証を得たからです。

イエズス会カトリックセンターで同じ信仰で結ばれている若い中国人に親しくさせて頂き、ささやかな奉仕をさせて頂きながら、私は心の中で神様に感謝しています。そして心の中で言います。「私は決して忘れません。日本人が中国でしたことを。時間が経っても、多くの人が忘れることがあっても、私は、忘れません」と。私が中国で生まれたことは、いわば、歴史のいたずらのようなことだったのかもしれませんが。たまたま、父母が中国に渡って、そこで結ばれた。そこで私が生まれた。数知れない日本人が日本に帰ることなく死んで行った。生き残って中国で育てられ、数奇な人生を送った方もいます。その子孫も沢山いることでしょう。いろんな思いがそれぞれの方にあるでしょう。中国に渡った日本人の子孫の一人として、負の歴史、つまり加害者であることを率直に認め、何ができるかを考えてゆく生き方をしてゆきたいと思います。神様は偉大です。感謝します。

西川 哲彌神父

聖母の被昇天祭において

初代教会では、マリアの「被昇天」ではなく、マリア様の「眠り入り」といわれていたそうです。

イエスは、例えば、死んでから4日も経った友人ラザロについて弟子に「私たちが愛するものラザロが眠ってしまった。しかし、私は彼を眠りから覚ましに行く。」(ヨハネ 11・11)とおっしゃいました。イエスにならって初代キリスト信者は、人の死は「人の眠り」と言っていた習慣があったと伝えられています。

聖母マリアはエフェソ(現在のトルコ)で息を引き取り、墓に収められてから数日後、行ってみると墓は空になっていたと伝えられています。それから、マリア様が「眠ってしまった」後、復活しているキリストと共に居られるという信仰が生まれました。最初のうちは「マリア様の眠り」という記念日でしたが、一生、特に十字架の下に居られたマリア様が、心身ともに救い主イエスと一緒にいること、当然復活したイエスと共に居られるものだという信仰が生まれました。私たちの「眠り」の後、我々の母マリア様と同じく、体の復活、永遠の命を希望して、信仰生活の道を歩み続けます。

ルルド、ファチマなどでは、生きているマリア様の姿が選ばれた方々に現れ、マリア様と対話もできたベルナデットやファチマの子供たちを通して、地上の教会、また全人類の救済について、ご自分の心の痛みを表してくださっています。教皇様の心の痛みと共感しておられると思います。

教皇様の最近の心の痛みの一つは、中国の教会に関係していると思います。一般の新聞にも報道されていますが、去年の暮れから、中国の司教、司祭、信者に政府が宗教局や愛国会を通して、教会法を省みず教皇の任命ないし承認を得ずに、数回、司教の叙階を行ないました。報道によると、叙階を与えた司教の一部は、かなりの圧

力を受けていたようです。公安局の役員が叙階式の行われる教会へ「案内」したり、その教会の入場を制限したりし、周りに警察も配置されていたというのです。

司祭や信者の中で混乱や不安が起こる事も当然です。教会法や教皇様の指示が正確に伝わっている司祭や信者と、政府の主張しか聞いていない信者もいるでしょう。現在、中国の97司教区中、半数近くの教区に司教がいません。司祭の任命、信者の司牧を行うための組織が十分にできていないところもあるので、指導力や若さのある司教の任命は急務です。中国の教会にとってこれからの十年の間に司教の任命が行われなければならないが、その新任司教が世界の教会、ペトロの座(現在のローマ教皇)との一致協力に対する姿勢が問われます。その新任司教、全ての司教と司祭の賢明な判断と勇気により、教会の歴史が大きく左右されるでしょう。中国の教会が教皇様、マリア様、イエス様の心が願っている方向へ発展しますように祈りたいものです。

センターの信者が東日本の3・11の震災の救済募金をし、決して裕福でないのに、¥126,000を送ることができました。ただし、震災が起こったとき、大学などの春休み中なので留学生、原発からの放射性物質汚染の恐怖のために子持ちの家族は、一時的に中国に帰りましたが、現在、ほとんど戻ってきています。

今年、8月13、14、15日、台湾の霊性センターの甘国棟神父が当センターで信者のために自分の宝箱を開けて分けていただくことになりました。謝謝。



ロバート・ディーターズ神父

わ か ち あ い

母国からのご挨拶

兄弟姉妹の皆様、その後、お変わりありませんか。

時間が経つのは早いもので、私と家内が帰国して4ヶ月近くになります。私たちは特に皆様を、懐かしく思い出しています。皆様ご存知のように、私たちが帰国した理由は東日本大震災ではありません。すでに昨年決まっていたスケジュールによるものでした。神様のご計画により、帰国後、私たちは、基本的には家で過ごしたので、忙しさが少々やわらいだ分、心配は幾分増えました。

日本での10年間を思い出すと、とても早かったし、早すぎて恐ろしいほどの感じがします。10年間は辛く忙しい留学と就職の生活だったと言えるでしょう。幸い私は多くの省内外、国内外の学友そして友人と知り合うことができました。中でも私に心の平安を感じさせたのは、私たち皆にとっての日本の家——上野教会の中国センターでした。これは日本にあるカトリックの華人センターで、心の拠りどころです。聖人のようなディーダズ神父様、他人を自分のように愛し中国語を流暢に話す井上神父様、お姉さんのような朱さん、中国語が流暢で、まじめだけどユーモアがあるシスター熱田とシスター西川のお二人。スタッフは米国人、日本人、台湾同胞と、国籍や言葉は異なりますが、目的は同じで、カトリック信者のために奉仕し、特に日本にいる中国のカトリック信者の兄弟姉妹のために奉仕をしています。

中国センターでの10年間の個人としての経験は、これからのセンターの長い歴史の中ではほんの一瞬だけかもしれないかもしれませんが、私にとっては青春の一番重要な時間でした。留学の最初からミサに参加するだけで、会食の時も食べ終えたらそそくさと帰る。多くの授業に出るためでしたが、心の中ではとても申しわけなく思い、たくさんのお金を借りに作っていると感じていました。いつも得るだけで、払っていなかったのです。このような借りの気持ちは、2008年の卒業、就職の前まで常に心の深いところにありました。この恩を何倍にもしてお返ししよう、いつかお返しできる日は必ず来ると、私はずっと信

じてきました。

2008年3月、神様のご計画により、偶然に朱さんと話をする機会があり、その中で、ついに私の恩返しの前幕が始まりました。その時、先輩たちの大部分はそれぞれの理由で次々に帰国し、委員や各種の必要なメンバーは激減していました。そして私は週末に時間があつたことと、皆様の細やかな愛によって微力を尽くすことになり、ミサの手伝いを学び、委員会に参加し、集まりの準備などをするようになりました。この時、私は初めて、先輩たちが苦勞ことを本当に理解しました。でも私たちは、同じ信仰、同じ目標に立って恨みも悔やみもしませんでした。

これは先輩、我たち、後輩が互いに伝えている精神です。ですから私は、中国センターのこの精神が、時間や空間の制限を受けずに永遠に伝えられていくことを信じています。私たち皆の心の深い所には、今も将来も、大切にしまつてある幸せな思い出があります。

最後に私たち夫婦は、皆様の健康と万事順風であるようにと祈ります！

信徒 吳昭偉と施婷

聖寵に満ちた中国センター

10年間ともに歩んだ中国センターには、ただひたすら感謝感謝です。親切で苦勞していらっしゃる神父様方、シスター、スタッフの皆様へ感謝。関心をもって支えてくださった日本の信者さんたちに感謝。信仰において大きな励ましをくださった兄弟姉妹の皆さんへ感謝。この10年を振り返ると、中国センターに関する思い出は本当にたくさんあります。ここで皆さんと2つの事を分かち合いたいと思います。

数年前のある夜、私と、かわいい小さな女の子を含む何人かの信徒は、中国センターの聖堂に行き、不法滞在のために逮捕された一人の信徒のために祈っていました。家に帰る途中、私はその女の子から電話を受けました。

その子は、さっき聖堂で祈っている時、イエスが祭壇の上に現れ、彼女にほほえんだと話しました。最初はまぼろしだと思ったので頭を振ってからまた見ると、イエスがまだそこにいたのが見えたそうです。喜びに満ちたその子は、主よ、もう少しいてくださいとイエス様に言ったそうです。イエス様はうなずいて、彼女の求めに応えました。女の子は、その出来事の前まではイエス様を恐れていたそうです。彼女の心の中では、イエス様は厳粛な顔を持ち、畏れの念を抱かせるイメージだったからです。でもそれから後は、彼女は二度とイエス様を恐れなくなったそうです。それからは、不安でどうしようもないと感じる時、中国センターの聖堂に行つて一人静かに座り、顔を上げて祭壇を見つめて黙祷するようになりました。私にはあの祭壇の上には何も見えませんでした。イエス様はそこにいて私たちを見つめ、聞いていらっしゃる信じます。

以前、中国センターのある信徒が、自分の身に起きた10円玉にまつわる話をしてくれました。日本に来た後の数年間に、彼はギャンブルにおぼれ、抜け出せないほど夢中になりました。ある夜、彼が店を出て帰ろうとしたら、ポケットの中のお金が帰りの切符に10円足りないことに気付きました。まさか今晚、遠い道を歩いて帰らなければならないのか？彼はこの時すでに疲れ果てていたのです。どうしようか？助けもなく呆然としていた時、彼は神様を思い出しました。彼は歩きながら祈りました。主よ、私をおゆるしてください。もし10円を下さつて私が今晚家に帰れば、これから先、もう賭け事をしません。駅前に着く時、ふと足もとに小さくて硬い物を踏んだ感じがしたので、足を上げて見ると、10円玉が1枚落ちていました。この出来事後、彼は主への約束を果たしました。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」。この2つの事を思い出した際に、イエス・キリストのこの言葉が私の耳元に響きます。

信徒 柯桂春

極端は失敗のもと

【評論 UCA News】任廷黎：国家は教会に介入すべきではなく、教職者は政治に参与すべきではない

私は1人の学者であり、カトリックの信仰を持っていない。ゆえに中国のカトリック教会がどうすべきなのか、中国の司教は誰から任命を受けるべきかなどの問題に対して、まったく個人的な主張を持たない。ただカトリック信者が良き公民、良き信者として、規律を尊び、法を守り、そして教義教則を遵守したいという願いが尊重されることを願うだけである。

だが最近、国内で立て続けに起こった司教叙階事件は、上は普遍カトリック教会の最高指導機構に前例のないほどの処罰を下させるに至り、下は国内の教職者と信徒の不満と分裂までを引き起こした。これはたいへん残念なことである。

常識が私たちに教えることは、中国は政教分離の原則を遂行しており、カトリックは中国の国教ではないので、カトリックの実務は中国の国家の実務ではない。ゆえに国家は教会に介入すべきではなく、教職者も政治機構の中で職務を担うべきではない。カトリック教会のことは教会自身によって行い、政府は社会の管理者として、それに対して法律に基づき監督の権限と責任を行使することだ。それだけなのである。世界の圧倒的多数の国家はすべて、そうしている。

しかし、国内には一貫して一筋の力が働いている。それはある人々の頭の中に存在している。それは革命の先輩たちの数十年に及ぶ堅忍不拔の闘争と流血の犠牲によって打ち立てた新中国をないがしろにし、改革開放によつてもたらされた光り輝く成果をもないがしろにし、宗教に対するマルクス主義の原則に背き、中国革命の方向を転換させ、必死になって政府を宗教との紛争の泥沼に引きずり込み、世界中のいかなる政府もしないことをやっているのである。

かなり以前に見たソ連映画を思い出す。その中の一幕は私に深い印象を残した。ボルシェビキ内部に潜入した敵は赤旗を振って反赤旗に向かい、誰よりも革命的であることを表し、革命行動を極左の誤りに導いて、ソビエト政権を転覆するよう企てた。最近、司教叙階をめぐる起こった事件は、調和のとれた社会づくりの雰囲気破壊し、社会安定を守るという大局を妨害した。歴史は何度も教えている、「極左は国を誤らせる！」。

独自任命、独自叙階の司教に関する弁解は、「主権論」であろうが「信教自由論」であろうが、どちらも意味がなく、いいお笑いぐさで、反論する値打ちもない。多くの事柄は中国に入ると異常に複雑になることがあるが、人々はある程度の経験をすでに蓄積しており、物事に対して判断する場合の簡単な基準を手に入れている。それは国内、そして国際的に重要な活動を避けるタイミング

を必要とするのか？ それは公で、透明か？ 取材、報道、討論できるか？ わが国にとって国際的な名声を強めるか？ 関係する人々の内心からの支持を得られるか？ などだ。これらの視点でここ何度かの司教の独自任命、独自叙階を判定すると、一目瞭然ではないのか？

中国のカトリック教会内部のいくつかのやり方は、本当に理解できない。例えば「独立自主運営」と「ペトロの継承者と交わりを保つ」という2つの完全に対立する観念を同じの文書に書き込んでおきながら、司教団は全体大会を開いたこともなく、団長は「破門」や現在の教会内部の混乱など重大な事件に声明を発表したこともない、などである。沈黙すべきに沈黙せず、沈黙すべきでないのに沈黙する。

最後に私は言いたい。国家は私たち自身のものであり、乱れは敵を乱さず、私たち自身を乱す。(7月22日)

著者：任廷黎。中国社会科学院の引退研究員、2005年に定年退職する前は、同院の世界宗教研究所キリスト教研究室の主任を務めた。

この北京在住ベテランアナリストは、1980年代から現代中国カトリック教会を専門に研究し、2001年、イタリア・ミラノの聖心カトリック大学(Universita Cattolica del Sacro Cuore)で博士号を取得した。